ひらく

●一点を支点としてひらく●窓・扉をひらく●道をひらく●口・目をひらく●花がひらく●運をひらく●文化をひらく●インターネットをひらく●新聞・本をひらく●講座・会をひらく

―― 未来をひらく、心をひらく ――

2022. 3

50

男女共同参画社会をめざす

特集1『ひらく』50号記念座談会

特集2 映画・ドラマ・本の中の男女共同参画

特集3『ひらく』を数から見てみよう！

特集1

●『ひらく』50号記念座談会●

『ひらく』はなぜ生まれて これまで何をしてきて これからどうしたいか

高浜　志織さん

小平市在住の大学３年生。
『ひらく』49号（2021年）から初めて実行委員として参加。

中丸友里恵さん

『ひらく』43号（2018年）から46号（2020年）に１人目の育休を利用して実行委員として参加。
2014年からデンマークに１年滞在。
現在は企業人事として勤務。

丹波　朋子さん

『ひらく』５号（1999年）から12号（2003年）に実行委員として参加。
アメリカに２年、オーストラリアに４年滞在。
現在は会社員として勤務。

髙橋　雅子さん

『ひらく』創刊当時をよく知る。
現在も実行委員として参加。

広報誌『ひらく』は、平成９（１９９７）年に発刊以来、回を重ねて50号となりました。その間、平成11（１９９９）年には「男女共同参画社会基本法」が制定されるなど、現在にいたるまでに社会のあり方が大きく変わってきました。

今号では50号を記念して、『ひらく』の誕生からこれまでを振り返りながら、これからの『ひらく』にどんなことができるのかを、実行委員として創刊当時をよく知る髙橋さん、20数年前に参加されていた丹波さん、育休を利用して参加されていた中丸さん、49号から参加の大学生で丹波さんの姪にあたる高浜さんの４人をお迎えして座談会を開き、率直な意見交換をしてみました。

司会　髙橋さんが実行委員会に参加するきっかけは？

髙橋　「小平市婦人のつどい」（現「小平市女性のつどい」）という団体に昭和60（１９８５）年から参加していました。その頃、小平市には男女共同参画を担う部署がありませんでした。自分たちで学習しながら、何とか市役所に部署を作ってほしいと要望を出し続けました。

司会　すごく積極的ですね。

髙橋　他の市にはあるのにという思いからでしょうか…その思いが通じ、平成４（１９９２）年に生活文化部に青少年・女性施策調整担当が誕生しました。女性係長が一人の部署ではありましたが、私たちの念願が叶ったと思いました。

司会　その後、『ひらく』がスタートしたんですね。

髙橋　はい。最初の実行委員メンバーは私を含め「小平市女性のつどい」の複数人が手を挙げ、広報誌の編集と講演会の運営を担当しました。自主的に他の市に皆で勉強に行ったりもしました。

司会　そういう活動が少し動き出した頃に丹波さんが登場されるのですね。

丹波　私は生まれも育ちも小平ですが、学校が小平ではなかったため、小平とのかかわりは少なかったんです。大学生の時にアメリカ留学した際にインターンのような感じで地域の女性クリニックで働いてみたり、慈善団体の活動に参加したことで人との出会いの面白さに気づきました。進んでいると思ったアメリカでも女性をめぐる問題とかいろいろあることを知り、ジェンダーにも興味を持つようになりました。

司会　『ひらく』との出会いはここからですね。

丹波　そうです。帰国してから市報を何気なく読んでいると（元々、地域のイベント情報が載っている市報を読むのは大好きでした。）「男女共同参画推進実行委員募集！」の記事が目に留まり、ボランティアで気楽だし、ジェンダーにも関心があったので応募しました。

司会　市報が役に立ったんですね。

髙橋　市報は私の愛読書よ。出産直前まで仕事をしていて出産後にぽつんと家にいる時の貴重な情報源でした。

司会　『ひらく』の発行も回を重ねてきた頃、中丸さんの登場ですね。

中丸　私は学生時代から女性の労働などを専攻していて元々このような活動には興味がありました。ワーク・ライフ・バランス憲章（注1）ができた頃に大学生で、男女共同参画に関連する企業やＮＰＯでインターンシップを行っていたため、いつか地元が出来たら地域の男女共同参画の活動に参加したいと思っていました。

司会　出産を機に小平にいらしたんですね。

中丸　はい。腰を落ち着けて活動できる場所ができたので、育休を使いながら地域活動の一環として『ひらく』に参加することにしました。子育てにおいても、多世代交流のようなことを子どもに体験させたかったことと、地域と関わりいろいろな人に見守られて子育てしたいと思っていました。

司会　高浜さんが入られたときに印象に残っていることはありますか？

高浜　自分の意見を確固として持っていて、このような公の場でも堂々と話される方に出会い、すごいなと感じました。周りの目を恐れずにしっかり発信される方が多いことは参考になりました。自分も今後、大学の授業や活動においてや社会に出ていく上で、そういうふうになりたいと思いました。

司会　丹波さんが参加された当時の印象は？

丹波　そうですね…実は、ジェンダーの意識が高く、専門的な知識のある方ばかりの集まりだったらどうしよう…とドキドキしていました。でも入ってみると一市民としてそれぞれの経験・思いから参加されている方ばかりで対等に意見交換できる雰囲気で安心しました。行動力、決断力、仲間と協力し合う、そういうことを見せてくださった先輩方の姿が若かった私の記憶には残っています。

司会　そういう体験が姪御さんに実行委員を薦めるきっかけになったんでしょうか。

丹波　実際に強く薦めたのは私の姉である彼女の母親ですね。社会勉強にもなるし面白い人がいるから行ってみたらという感じかな。実際そうだったでしょ？

高浜　（こくんと頷く）

丹波　参加して何か感じることがあればという感じでしょうか…私自身、男女共同参画という名称が少々硬く抵抗があり、『ひらく』という広報誌のタイトルと真逆にあると当時から思っています。

司会　こういう場での発言はハードルが高いですか？

高浜　今現在、大学3年生なので就職活動を控えています。それにあたり、社会というか外の方と話をする経験が欲しいと思っていたところ、叔母から『ひらく』の話を聞き、こういう経験は今後に生かせると思いました。参加するまでは心配や不安もありましたが、実際に参加してみたら気軽に話せるし、いろいろな意見交換ができる場だと分かりました。

司会　中丸さんは以前から男女共同参画について関心もあり、経験もあって他の自治体のこともご存じかと思いますがいかがですか？

中丸　もったいないという印象でしたね。男女共同参画の実行委員会がもっと力を発揮している市もあります。メンバー数も30人くらいだったり。小平市は広報誌『ひらく』とフォーラム開催くらいで、閉じこもっている気がします。

司会　もっといろいろできるんじゃないかと…

中丸　でも、実行委員会の場としては赤ちゃん連れで参加し授乳もできるし、布団も用意されていたり、おじいちゃんおばあちゃん世代の方が子どもをあやしてくれる場所でした。そういう景色が地域になくなってきている現状があるからこそ、地域と子育て世代が融合し、ひらいていける関わり合いができたらいいなと考えています。私の住む花小金井付近も子育て世代が増えていると感じますが、保守的な世帯が多いのかな。

司会　年に2回の広報誌の内容はもっとひらかれて、実行委員の伝えたいことが伝わるようになりたいですね。

髙橋　本当ですね。表紙も創刊当時は印刷業者のデザインを採用していましたが、実行委員が表紙を提案するなど、自分たちの思いを伝えるために実行委員会ではいろいろな動きがありました。

丹波　印象に残ったことにプラスしてもいいですか？　市の担当職員の方との関わり合いも忘れられません。ご自身も問題意識をしっかり持っている方で勉強もされているんだけれども、それを押し付けようとはせずに私たちの意見を静かに傍らで聞きつつ、私たちが思わず暴走しそうになると納得がいく説明でいい方向に導いてくれるというか…市民の力を後押ししてくれるのが市の職員であったりもするんですよね。

司会　市と市民、お互いのエネルギーを上手に使えると良いですね。

丹波　今年の実行委員会も私がいた当時と似た良い雰囲気を感じます。

司会　実行委員同士が刺激しあってお互い勉強になることもありますね。

髙橋　そうですね。元々、こういった活動に関心があり企業での経験もある若い世代の中丸さんが育休を使って参加された際にも、学ばせてもらうことがたくさんありました。

司会　市民活動とは、できれば様々な立場や世代の方が参加することが望ましいですよね。学生の立場の高浜さんはその点についてどう思いますか。

高浜　自分の意見を真っ直ぐな言葉で伝えている方を見て、大きな刺激を受けました。自分だったら意見を言う際に、相手がどう思うかを考えすぎて、オブラートで包んだ表現になりがちなので。

司会　では、そこから少し飛躍して、海外の様子についても知りたくなりましたね。海外で暮らした経験のある中丸さん、丹波さんに日本との違いをお尋ねしたいと思います。

中丸　私はデンマークに1年間暮らしていました。デンマークは世界幸福度ランキング

で1位を取ったこともある国で、北欧の特徴である福祉国家（社会保障制度の整備を通じて国民の生活の安定を図る体制をとる国）です。そんな国に住んでみて感じた幸せになるための秘訣は、「幸せのハードルを上げない」ことでした。例えば、デンマークでは「日向ぼっこ」が娯楽となっていて、びっくりした体験があります。

高橋　日向ぼっこが娯楽とは、東京ではあまり考えられないですね。

中丸　デンマークは冬が長く日照時間は1か月で6時間なんて時もありました。そんな気候だからこそ、晴れた日にはすべてのことを放って日向ぼっこに出かけます。「陽が出てるのは最高！」とばかりに、何もしないで自分と向き合う時間〝余白〟を大切にしているんです。そういうことを幸せと感じる文化、風土がありますね。

司会　日本ではなかなか生まれない発想ですね。

中丸　日本のような資本主義社会では常に「幸せになりたい」と思い続け、そこに達すると「さらなる次の幸せを」といつまでも終わりがないというか、皆が頑張っているから自分も止まってはいけないという焦燥感のようなものがありますよね。「将来に向けてこうあるべき」というような不安を煽るビジネスも横行しています。本当は「今の幸せを感じる」ことをもっと一人一人ができれば、幸福度もあがるかと思います。日本は物質的に豊かで治安もよく世界的にみると恵まれている環境なのに。

高橋　その通りですね。

中丸　デンマークには「ヒュッゲ（HYGGE）」という心地よさを大切にしている時間の過ごし方や心の持ち方を表す言葉があるのですが、小平市にはヒュッゲを感じられる場所がたくさんあります。

司会　『プチ田舎』（注2）なんて紹介されますものね。

中丸　東京ではあるけれどもほっとする自然がたくさん残っていて、活性化もしてきている、いい塩梅の地域だと感じています。まだまだ、男女共同参画の立ち位置が周りの市や区に比べはっきりとしていない部分もありますが、子育て世帯にむけてブランディング（注3）できそうないい環境はそろっていると思います。

高橋　ポジティブに仕事と子育ての両立にむけて考えてみませんかという企画を中丸さんを講師にやりたいですね。

中丸　高橋さんをはじめ、子育てと仕事の両立が大変だった時期を乗り越えてくださった方々がいたからこそ我々の世代は、昔と比べて両立をしようと思えば沢山の解決策のあるいい時代に生まれたなって思います。もちろん、まだまだ変えていきたいところはあるので、次の世代のために今何をすべきか考えてやっていきたいですね。

司会　小平は男女共同参画が進む町みたいなことをめざしたらいいんじゃないかしら。事実、多くの保育園の新設が進み、女性が働きやすい環境になっていますよね。

中丸　働きやすいというか、公園が多く、平らで移動がしやすいところなど、確実に子育てがしやすい町ではあります。

司会　丹波さんからも海外経験のお話を伺いたいと思います。

丹波　私は学生の時にアメリカに留学していたのと、社会人になってから4年間オーストラリアで暮らしていました。アメリカでは多様性を強く感じましたね。移民が多く、異なる人種の人たちが、偏見や差別はあるにせよ当たり前に存在しているという感じです。当時、英語が全然だめだったけれど、何かやってみたいと発言すると、自然に周りがより良い方向へ導いてくれるような前向きなサポートがありましたね。それはもちろん男性、女性やLGBT（注4）にかかわらずでした。

司会　アメリカは日本に比べて進んでいますか？

丹波　いいえ、そういうわけではないと思います。その当時、「レストランで授乳が許されるようになったのは最近なのよ。」という話も聞きました。アメリカは進んでいて、日本は遅れているというわけではなく、アメリカでも常に問題に直面した際には戦い、そして権利を得ているということだと思います。

司会　オーストラリアの印象は？

丹波　現地の会社に勤めていて、様々なオンライン研修を受けるのですが、その内容に人権意識の高さを感じました。セクハラ、DV（ドメスティック・バイオレンス）、そして4人に1人は移民という状況から人種差別についてなどです。例としては「普段はマスクをしていない同僚が、どうして今日はしているんだろう？　もしかしたら暴力による顔のあざを隠しているのかもしれない。と察知しましょう。」という感じです。

司会　いろいろな立場の人にやさしい社会ですね。

丹波　育休、産休に関わらず、急な子どもの発熱なんかでも当たり前に休めるのが普通という感じでしたね。また、日本に住んでいるときには、言葉としては知っているものの、あまりピンと来ていなかった「ワーク・ライフ・バランス」の実践を目の当たりにしました。5時からの自分時間のために4時くらいから準備を始め、5時ジャストには職場を飛び出していくという、仕事とアフターファイブの切り替えの潔さにはびっくりしました。私としては、仕事のキリ

が悪ければ少しくらい残業しないと仕事をサボっているんじゃないかと思っているのが当たり前の考えでしたからね。彼らは『ワーク』をサボっているのではなく、『ワーク』の残り時間が『ライフ』なのでもなく、『ワーク』はしつつ、家族・友人関係や、趣味などの『ライフ』を自ら選んで大事にしているんだと気が付きました。

司会　海外と日本の男女共同参画の捉え方の違いみたいなことはありますか？

中丸　デンマークは今も女性が首相で、閣僚の半分くらいを女性が占めていますね。最年少の議員さんは10代です。日本とは感覚として30年くらい違いますね。それはなぜかというと、すでに１９７０年頃から「男性も育児参加を！」みたいな活動が始まっているので。でも、日本も少しずつ変わってきていると思いますよ。

司会　確かに、私や髙橋さんの時代からしたら、政治参加、夫婦の関係性など格段の差がありますよ。

丹波　オーストラリアでは１９０２年に女性の選挙権が認められ、女性国会議員誕生が１９４３年。２０１９年、ようやく上院の議員数が男女同数になりました。性別に関することだけでなく、原住民のアボリジニや、様々な人種・民族が共生するため、時代に応じて法律もどんどん変化していくんでしょうね。２０１７年の同性婚合法化も大きなニュースでした。不平等を感じ困っている人が現状を打破しようと戦い、変化が起きるんですよね。

司会　高浜さんは女性としての生きづらさや男女差について感じることはありますか？

高浜　環境として、中学から大学までずっと女子のみの学校に通っているので、男性と一緒になる機会が少ないからかもしれませんが、そんなに格差があるとは感じません。

丹波　これから社会に出ていくと、格差や違和感を感じることがあるかもしれないね。

司会　皆さんの話を聞いていて、未来が少し見えてきたように思います。『ひらく』はこれからも続きます。これからこんな方向性にしたら、こんな企画があればなど、またどんな扉を開けてほしいかなどを聞かせてください。

中丸　以前、関わった46号の特集のような座談会を開きたいですね。10代から70代の多世代が集まり一つのテーマについて掘り下げていくような。できれば『ひらく』の紙面だけでなく、小平は広いので場所を変えたりして開催できればいいですね。

司会　楽しそうですね。

中丸　市民団体や学校と連携していけたらいいですね。

司会　高浜さんは何か考えていることはありますか？

高浜　小平市の女性市長と話がしてみたいです。『ひらく』実行委員会に参加していても男女共同参画について知らないことがいっぱいありそうな気がします。小平市での男女共同参画の取り組みなどを聞いてみたいですね。

もっと勉強できるような企画ができたらとも考えています。

司会　丹波さんはどうですか？

丹波　『ひらく』は人の顔が見える感じが好きです。今後は、ＱＲコードやＳＮＳ環境を積極的に活用することを提案したいです。『ひらく』を開いて、さらにその先につなぐような紙面になったらいいと思います。紙面だけでは書ききれない情報や思いを知ることができる仕掛けのようなものがあっても楽しいですね。

司会　この実行委員会自体がアカウントを持ち、ｗｅｂでの活動も並行していけたらいいですね。

丹波　Ｗｅｂ版もあれば『スマホでひらく』というフレーズでもっとたくさんの人にアクセスしてもらえるかもしれませんね。それと、小平にある企業で多様性に関しての意識調査を実施してみるなんてどうですか？　様々なバックグラウンドの方が働く職場で直接インタビュー調査をしてみたりすると、何かしらの課題やそれに対する取り組みの糸口が見つかりそうですね。

司会　小平で働いている人からもお話が聞けるとまた新しい扉がひとつひらかれますね。

丹波　そういう企業に『ひらく』を置いてもらうきっかけにもなりますね。

司会　これからの『ひらく』に、本当の意味での広がりが感じられる話し合いになりました。ありがとうございました。

（注1）仕事と生活の調和（ワーク・ライフ・バランス）憲章
仕事と生活の調和の必要性、めざすべき社会の姿を示し、官民一体となって取り組んでいくため、平成19（２００７）年12月に策定された憲章。

（注2）プチ田舎
ゆったりと住みやすい小平市の魅力を伝えるキャッチフレーズ。

（注3）ブランディング
固有の価値を高めるための組織の戦略。

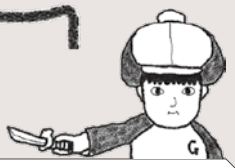
（注4）ＬＧＢＴ
性自認が生まれた時の身体的な性別と異なる人や、性的指向が異性愛ではない人など性的マイノリティ（少数者）を表す総称のひとつ。

※撮影時のみマスクをはずしています。

新型コロナウイルス感染症が日本に現れて変わったことは何かというと、家にいる時間が長くなったこと。決められた予定をこなすことが大好きな日本人には当てのない自宅待機はちょっと辛いけど、そこはネット時代、映画館に行かなくても映画を楽しめるようだ。NetflixやAmazon Prime Video（注）なんていうアプリが世界中の映画やテレビ番組を見せてくれる。つまり、自分の部屋の中で、行ったこともない国の社会や文化を見ることができる。今、世界で何が問題になっているのか、時間をかけて考えてみよう。

特集2

映画・ドラマの中の男女共同参画



「コタローは1人暮らし」

「裸の王様」の子どものように、いつも真実を教えるのは子どもだ。5歳の子どもが一人暮らしをする非現実的な設定のこのドラマの中で、子どもは真実を呟く。「代わりのものなどいらぬ」「泣いてもわらわはお主のことを嫌ったりせん」など、すがすがしいほどの真実を口にする。動物や子どもの芸を可愛いと思う勘違いを躊躇なく否定してくれる厳しさがある。5歳の子どもが隣人に引越しの挨拶をしたり、園服の名札を自分でつけたり、そんなことをさせてしまう社会の理不尽さを、ただ可愛いだけで目を細めていていいのだろうか。そんなことに慣れてしまうのはまずい。子どもは社会に守られるものなのだから。しつこいくらい劇中に出てくる「これはフィクションです」が本当に本当であることを願う。

（Netflix）

「たちあがる女」

女性議員が議会の半分を占めるアイスランドを舞台にした「たちあがる女」は、アマチュア合唱団の指揮者である女性ハットラが地球温暖化を阻止するために、アイスランドの荒野に立つ巨大な鉄塔をたった一人で倒壊させるシーンから始まる。政府はこれをテロ行為とみなし、ドローンを駆使して追い詰めるがハットラは弓矢を武器に攻撃を止めない。

山女と名乗る環境活動家の彼女が地球を守りたいという思いからどのように行動していくのか。タイトルどおり「たちあがる女」の一挙手一投足が感動的だ。

（Amazon Prime Video）

「ボーダータウン」

フィンランドの湖畔の町ラッペーンランタが舞台の犯罪ミステリー。静かな田舎町ラッペーンランタは、実は大都市ペテルブルグに車で数時間の距離にあり、そのことが凶悪な犯罪を生んでいる。

主人公のカリは人間関係を上手くつくれない性格で、自分の中で推理を組み立てていくことが得意な刑事。長い手足をもてあましたように歩く。丸く膝を抱えるように座る。まるで優しいオランウータンのようなカリの動きは、効率を優先する現代人には妙に心地よい。内容の凶悪さとは裏腹に、フィンランドの時間の流れに引き込まれていく不思議なドラマだ。

（Netflix）

「思いやりのススメ」

介護士ベンは、初仕事で筋ジストロフィーを発症した青年トレヴァーと出会う。重病患者らしからぬ車椅子のトレヴァーは、ベンを試すようにユニークなユーモアで驚かせたが、やがて二人の間には介護士と患者ではない対等な関係が生まれてきていた。そして、二人は母親の心配をよそにトレヴァーが以前から見たがっていた観光地への旅に出かける。いかにもアメリカ映画らしい、障がいさえも希望に変えるオプティミスト（＊）ぶりは少々しらけるけれど、こんな風に考えなくちゃやっていけないアメリカの現実を思い知らされる超健康的なロードムービーだ。（Netflix）

＊オプティミスト：楽観主義者、楽天家。

（注）Netflix、Amazon Prime Video：インターネットでドラマや映画を視聴できる有料の配信サービス。
紹介したドラマや映画の情報は令和４(2022)年３月現在の情報です。

本の中の男女共同参画

『コロナ禍の東京を駆ける 緊急事態宣言下の困窮者支援日記』

稲葉剛　小林美穂子　和田静香　共著

令和2（2020）年4月、新型コロナウイルス感染症による緊急事態宣言が出されてから、そのために行き場を失い職を失った人たちがどのように生きていたか。彼らに対する行政の対応はどんなものだったか。本書は、路上生活者や生活困窮者の支援を続けている一般社団法人つくろい東京ファンドのボランティアたちの昼夜を問わぬ支援活動の記録だ。

メンバーは、4月以来、次々に掛かってくる、生活困窮者やネットカフェを追い出されて街をさまよう人々からのSOSをいち早くキャッチして行政の福祉課につなぐ。しかし、その福祉課は必ずしも救済の手を差し伸べてはくれない。

福祉課とボランティアたちの攻防戦が始まった。宣言が出された4月から2か月間の彼らの日記をまとめたこの本を読むと、日本の福祉について考えさせられるとともに恐ろしくもなってくる。

岩波書店　1900円＋税

『ジソウのお仕事 50の物語（ストーリーズ）で考える子ども虐待と児童相談所』

青山さくら　川松亮　著

ジソウとは児童相談所のこと。ジソウの職員が書いた50のケースが出てくる。子どもは生まれてくる親を選べないと言われるが、読み進めるのが辛い。ジソウは子どもを保護するが、同時に「親子の再統合」もする。その仕事は「終点がない長いトンネルのようなもの」とある。ジソウの大ベテランの言「相談者にふりまわされてもいい。それが本来の姿」には唸るしかない。

フェミックス　1800円＋税

『コロナ禍、貧困の記録 2020年、この国の底が抜けた』

雨宮処凛（あまみやかりん）　著

作家で活動家の雨宮処凛がコロナ禍での行政の対応について怒り、活動家として困窮者たちの支援に奔走している。付き添いで行った千代田区や杉並区の福祉事務所とのやり取りには、「何で？」「行政の仕事は何？」と、数々の疑問がわいてくる。これから更に深刻化するコロナによる生活困難者の救済問題に行政はもっと愛情を持って対応して欲しい。彼女の嘆きが行間から伝わってくるドキュメンタリーだ。

かもがわ出版　1600円＋税

『チョンキンマンションのボスは知っている アングラ経済の人類学』

小川さやか　著

香港に住むタンザニア人の地下経済の仕組みに迫った本。なぜアフリカの人たちがアジアにいるのか、どんな商売なのか、疑問が次々とわく。その経済の中心でSNSを駆使する、チョンキンマンションのボスの動きを解き明かす。文化人類学者、小川さんの文章が読者を飽きさせない。「ついで」の論理という彼等の考え方が、非常に人間らしい。「困ったときはお互い様」に似ている気がする。

春秋社　2000円＋税

『主婦の給料、5億円ほしー!!!』

鳥谷丁子　著

ワーママのあるあるネタを描きまくった漫画。登場人物はニワトリ一家。主人公丁子さんの負担は雪だるま式にふえていく。自分の気持ちを隠さない彼女は「5億円ほしー！」と吠えながら生きる。夫、Pちゃんは、たまには子どもをお風呂に入れ、食事をつくり、いつも丁子さんを世界で一番愛している。後半で丁子さんは、はたと気づく。いつもニコニコしながら自分たちのそばにいた母親の偉大さに。

KADOKAWA　1100円＋税

『故郷の味は海をこえて 「難民」として日本に生きる』

安田菜津紀　著　写真

故郷を捨てざるを得なかった人たちのことを日本人はあまりにも知らない。やっとの思いで日本にたどり着いた人たちの境遇が故郷の味とともに語られる。そして、私たち日本人についても気づく。多彩な食べ物の写真と笑顔の人たちがいい。辞書を引かなくても読めるようにフリガナが全文についている。令和3（2021）年話題になった、難民や入管（入国管理局）などについてのわかりやすい解説ページもある。

ポプラ社　1400円＋税

『女性のいない民主主義』

前田健太郎　著

令和3（2021）年末、民主主義サミットがオンラインで開催された。人類の歴史の中で女性がいる民主主義の国が多くなったのはごく最近のこと。日本では100年にもなっていない。ニュースや国会中継を見て、女性にも関係があることをどうして男性ばかりで決めるのだろうと感じる人たちは結構多いのではないか。小平市男女共同参画推進条例にも「大切なことはみんなでいっしょに考えて、話し合って決めよう」とある。多様な視点に開かれた政治学は大事だ。

岩波書店　820円＋税

『We くらしと教育をつなぐ』

創刊以来、暮らしと教育との関係を扱ってきた本。定期購読ができる。行政が取り扱うことからこぼれ落ちてしまうようなことを丁寧に扱ってきた。例えば、家庭科共修のこと、福島のこと、ジソウのこと、等々。ニュースになったことでも一過性で終わらせないで、深く掘り下げていく作り手の気持ちが伝わってくる。ホームページあり。

フェミックス　830円＋税

小平アクティブプラン21（第四次小平市男女共同参画推進計画）を策定しました！

『男女共同参画宣言都市こだいら』
第四次計画策定（令和４年３月）を機に宣言しました。

小平市では、だれもが互いにその人権を尊重しつつ責任も分かち合い、性別にかかわりなく、その個性と能力を十分に発揮することのできる男女共同参画社会の実現をめざすため、令和４(2022)年３月に第四次となる計画を策定しました。

計画の素案に対する市民意見公募手続き（パブリックコメント）期間に合わせて、ジェンダー平等をめざすオンライン連続講座及び地域懇談会を開催し、66件のご意見をいただきました。ご意見をいただいた皆様、ありがとうございました。

ジェンダー平等をめざすオンライン連続講座及び地域懇談会を開催しました！

（報告：こだいらDV防止ネットワーク）

男女共同参画センター利用登録団体のこだいらDV防止ネットワーク（通称Ｐネット）は市との協働で全３回の講座を開催しました。

▶第１回　2021年11月12日

ＤＶ・性暴力の根絶「愛が暴力にかわるとき」　**講師：森田　ゆりさん**

【概要】ＷＨＯは、コロナ禍以前から「DVや性暴力は感染症同様に公衆衛生の最重要課題」と指摘。アメリカでは多大な予算がついて法整備が進んだ。子ども虐待の背景にあるＤＶが見過ごされ悲しい事件が後を絶たない日本でも、防止と被害者救済・支援策の充実が急がれる。

▶第２回　2021年11月16日

働き方改革とライフシフト「そとの時間もうちの時間も分け合おう」　**講師：浅倉むつ子さん**

【概要】コロナ危機で、多くの非正規雇用の女性が職を失い自殺者も大幅に増えた。さらに在宅時間が長くなり、ＤＶや性暴力の相談も増加。家事・育児・介護をしない「ケアレスマン」を正社員モデルにするのはやめ、だれもが仕事と生活を両立する社会にすることが必要。

▶第３回　2021年12月５日

ジェンダー未来論「同じ景色が見える社会へ」　**講師：上野千鶴子さん**

【概要】政治家や官僚などのセクハラや性暴力の事件が多発し、#Me Too運動にもつながった。コロナ禍で、女性の貧困の厳しい現実が見えてきた。これまでにフェミニズムが社会を変えた成果もある。“わきまえない女”たちが仲間をつくって社会を変えていこう。

「小平アクティブプラン21（第四次小平市男女共同参画推進計画）」は小平市ホームページで閲覧できるほか、市役所１階市政資料コーナー、東部・西部出張所でも閲覧できます。
なお、市政資料コーナー、東部・西部出張所では、１冊450円で販売しています。

計画は、「基本目標」「施策」「施策の方向性」の３段階の体系になっています。
全部で50の事業項目を掲げ、市と市民、事業者が一体となり、男女共同参画社会の実現をめざします。

基本目標	施策	施策の方向性
基本目標Ⅰ 男女共同参画によるワーク・ライフ・バランス（仕事と生活の調和）と女性活躍の実現	1　ワーク・ライフ・バランス（仕事と生活の調和）の推進	①ライフスタイルの多様化に対応した就労環境の整備 ②家庭生活（家事、子育て、介護等）でのワーク・ライフ・バランスの推進　重点① ③くらしを豊かにする地域活動の推進
	2　女性の職業生活における活躍支援（女性の職業生活における活躍の推進計画）	①働く場における女性の就業継続・活躍の支援（女性活躍推進計画） ②市役所におけるワーク・ライフ・バランスの推進　New 1
	3　政策や方針を決定する場への男女共同参画	①市役所における女性活躍の推進 ②委員会・審議会における男女共同参画の推進
基本目標Ⅱ さまざまな困難を抱える人にとっての安全・安心なくらし	1　さまざまな困難を抱える人の安全・安心なくらしへの環境整備	①生活困窮者やひとり親家庭等への支援の充実 ②高齢者、障がい者、外国人等が安心してくらせる環境の整備 ③多様な性（性的指向、性自認）への理解促進と尊重　New 2
	2　人生100年時代、生涯にわたる健康施策の推進	①健康保持、健康づくりへの支援 ②妊娠、出産等に関する健康支援
	3　あらゆる暴力の根絶のための施策の推進（配偶者暴力の防止及び被害者保護等のための計画）	①配偶者等からの暴力（ＤＶ）の防止と被害者支援の充実 ②ハラスメントや性暴力等への対策　重点② ③相談機能の周知と一層の充実
基本目標Ⅲ あらゆる分野における男女共同参画と推進体制の整備・強化	1　あらゆる場での男女共同参画意識の醸成	①地域と協働した男女共同参画の推進　New 3　重点③ ②学校教育における男女共同参画の推進 ③固定的役割分担意識、無意識の思い込みの解消　New 4　重点④
	2　男女共同参画の推進体制の整備・強化	①小平市男女共同参画推進条例の啓発・推進、男女共同参画推進計画の進行管理と女性活躍に向けた現状把握 ②さまざまな視点による災害に強い地域づくり　重点⑤ ③市役所内の連携と市内外関係機関との連携強化

特集3 『ひらく』を数から見てみよう！

『ひらく』50号から **50** に因んで…
小平市にある公立学校で令和3年度に
50周年（昭和46年開校）を迎える学校は
小平第五中学校と小平第六中学校

『ひらく』の発行部数は **7,000** 部
市報「こだいら」の発行部数は
世帯数＋α＝約98,000部
現在の世帯数は約94,000世帯
めざせ！全世帯配布

『ひらく』で紹介された
〈いきいきレディ〉の人数は **48** 人
どなたもキラキラしていました
小平には、まだまだ紹介したい
魅力的な方はいっぱいいますよね

『ひらく』で紹介された本の数は **172** 冊
その多くは小平元気村おがわ東
男女共同参画センター“ひらく”の
本棚に収蔵されています
お気軽にのぞいてみてください

『ひらく』の配布場所は **140** か所
商店街の協力店舗から市役所まで
幅広く置かせてもらっています
創刊当時は10か所くらいだったので
増えましたね
皆さんはどこで手に取られたのかしら

各年の実行委員の平均は **11.1** 人
様々な世代や立場の方がいます
実行委員会では
意見が飛び交い楽しいですよ
毎年、市報で市民の実行委員を
募集しています

行ってみました

多摩六都科学館　ミニ企画展
科学の本棚Ⅱ
～科学と女性～

花小金井駅北口からスカイタワー西東京（通称田無タワー）の方向に歩いて約20分のところに多摩六都科学館があります。世界一に認定されたプラネタリウムと5つの展示室で、観察・実験・工作が楽しめる体験型ミュージアムです。小平市、東村山市、清瀬市、東久留米市、西東京市の5市で運営しています。

令和3（2021）年11月5日から12月5日までの1か月間、ミニ企画展「科学の本棚Ⅱ　～科学と女性～」が開催されていました。この展示会の企画を担当された原さん（写真）に、展示期間中のお忙しい中、案内していただきました。

簡単な工作・実験と科学についての絵本の読み聞かせプログラムが従来からありましたが、科学館2階の図書コーナーでは休憩しながら本を手に取る方々が意外と多くいるので、科学の入り口となるような本をまとめて紹介してみようということになりました。1回目は、令和元（2019）年に周辺5市図書館の協力で科学の絵本を展示しました。併せて「科学との出会い」をテーマに協力関係にある大学や研究機関の研究者の方々に推薦文を書いていただき、「私の1冊」として展示しました。

今回は「ジェンダー平等」や「質の高い教育」がSDGsの目標になっていますので「科学と女性」をテーマにしました。「女性科学者について書かれた本、女性が書いた科学の本」、「リケイのお仕事」、「ジェンダーを考える本」に分類して展示しています。絵本も多く紹介しています。

「私の1冊」のコーナーでは、協力関係にある大学や研究機関の女性研究者の方々12名に「若い人に読んでほしい本」というテーマで推薦をお願いしました。小説や伝記などジャンルは様々で推薦文とともに展示しています。

ミニ企画展は終了しましたが、紹介した本のリストや「私の1冊」のコーナーについては、科学館ホームページに掲載されています。「多摩六都科学館　科学の本棚」で検索してください。

『ひらく』の書棚

小平市男女共同参画センター“ひらく”にある本の紹介です。

『いいたいことがあります！』

魚住直子　作
西村ツチカ　絵
〈偕成社〉
1400円＋税

女子というだけで兄や父より多く家事を手伝わされる事や望まぬ中学受験にモヤモヤを抱える主人公が、スージーという女の子との出会い、対話をきっかけに母に正面から意見をぶつけ、自らが抱える問題と向き合う作品である。

作中で見られる「女子は家事ができなくてはいけない」「優秀な学校に行くことが幸せになる道である」という考え方は、私にとっても身近だ。しかしこれは親個人の価値観ではなく、親自身も自分の親からこのような考え方の元で育てられてきたことを繰り返しているから、現在でも根強く残っているのではないか。

この作品は、代々の親が娘に対して抱いてきた固定観念を考え直させ、子どもがそんな親に感じている窮屈さから抜け出す勇気を与えてくれるように思う。

『パンツのなかのまほう』

なかがわ　さやこ　作
でぐち　かずみ　絵
〈かもがわ出版〉
1600円＋税

作者の中川さんは英国在住の大学教員で、元毎日新聞記者です。

新聞記者時代に教員からの子どもの性被害事件を取材した経験、英国での子どもの性被害の調査などから、加害者は子どもの顔見知りの大人が多く、子どもが被害を訴えにくい要因の一つになっていることが分かりました。

中川さんは、絵本にして性被害の対処方法などを具体的に子どもたちに伝えることが大切だと思い絵本にしたそうです。

やさしい絵で、子どもたちに「自分の体を守ること」、「被害にあったら信頼できる人に伝えること」、「恥ずかしいことではないこと」を伝えています。

巻末には、大人へのメッセージと通報先・相談先などが記されています。

『裸足で逃げる　沖縄の夜の街の少女たち』

上間陽子　著
〈太田出版〉
1700円＋税

東京から沖縄に戻った上間さんが出会って、相談されたり支援したりした未成年の少女たちについて書いた書籍です。書かれている少女たちはキャバクラや風俗店で働いていますが、多様な問題を抱えていました。

友達のいるところでだれにも気づかれず一人で泣いたり、ココアを飲みながら知らない男とセックスした話をしたり、カバンにドレスをつめこんで学校へ行き、そのままキャバクラに出勤したり、問題を抱えながら必死で生きる少女たちに寄り添い、上間さんは相談を受けたり、支援したりします。

上間さんの支援で人生を立て直していく少女たちは、自分の気持ちを肯定し、傍にいてくれる上間さんを信頼します。こんな人が近くにいればいいなと、この本を読んだ人も思うでしょう。

＊男女共同参画センターで借りることができます。

表紙について

市役所横の芝生広場で布の絵本を撮影しました。小平市の団体、布の遊具〝ひまわり〟は約30年にわたり布の遊具や絵本を作成し、小平市立図書館へ寄贈する活動を続けています。布の遊具や絵本は障がいのある子どもたちが実際に手に触れて楽しむことができるよう様々な工夫が凝らされています。小平市の特徴や良いところを表す作品を選びました。

実行委員会活動の一端を紹介する動画として、撮影の様子を令和3（2021）年元気村まつりのホームページに掲載しました。QRコードからアクセスできます。

撮影　長塚秀人

編集後記

● 新型コロナウイルス感染症の第6波が本格化し、いつパンデミックが収束するのか不安になる時もありますが、少しずつ友達と出かけられるようになったり、好きなアイドルのライブに行けるようになったり元の日常に戻ろうとしているのを実感するので、みんなで感染対策の徹底をもうあと一息頑張っていきたいですね。（S・T）

● 創刊号から実行委員として関わり今回記念すべき50号の発行となり、感慨深いものがあります。何を市民の方に伝えたいのか常に考えてきました。今後も情報を提供し、より多くの人に読んでほしいです。（雅）

広報誌『ひらく』の最新号はこちら

小平在住・在勤・在学の女性を訪ねて、
そのいきいきした様子や元気の素を伝えます。

いきいきレディ48

ココロとカラダの健康をめざす
宮井 桂子（みやい けいこ）さん

宮井桂子さんは、５児の母として子育てに奮闘しながら、ヨガ、アクアビクス、ノルディックウォークなどのインストラクターをしています。仕事でも、家族や自分自身のことでも、テーマは「心身の健康」と話します。

宮井さんが、フィットネスクラブ勤務以外で最も力を注いでいるのは、地域活動としてのノルディックウォークのサークル運営です。『歩歩路（ほほろ）』という団体で、小平市内で月５回活動しています。ノルディックウォークは、効率的な有酸素運動というだけでなく、体力や目的に応じて年齢に関係なくだれでも楽しめるところが最大の魅力だそうです。「自然に親しみ、時には歴史に触れ、遠い昔に思いを馳せながら、仲間と一緒に和気あいあいと歩く…そんなひと時が、私にとっても心のオアシスとなっています。やりがいを感じると共に、メンバーの皆さんから元気をもらっています。」と宮井さん。小平市の教室を担当する機会もあり、ノルディックウォークを楽しむ人が増えてきて嬉しいと笑顔で答えます。

けれど、ここまでの道のりは、順風満帆ではなかったようです。子育てのスタートは23歳。専業主婦として過ごした10年間には、ストレスから体調を崩して入院した時期もありました。16年前、小平市に引っ越してきて、子育てサークルに参加したり保育付き講座を受講したりするうち、体調も良くなり、子育てを楽しめるようになったそうです。４人目の子どもの妊娠を機に専門学校に通い、ヨガ講師の資格を取得。鈴木公民館で保育付きヨガサークル『プラーナ』の活動を始めたことが、ライフワークの原点となったといいます。今年は『プラーナ』発足から11年目です。

８年前からは、小平市地域健康づくり推進員としても活動。次々と新たなチャレンジをして、子育ても仕事や地域活動も楽しんでいる宮井さんを応援したくなります。

ひらくの言葉　「ヘルプマーク」

ヘルプマークとは、外見からは障がいや疾患があるようにみえない人が、支援や配慮を必要としているのを周囲の人に知らせるマークです。

例えば、内部障がいや難病の人、義足や人工関節を使っている人など、ヘルプマーク所持者に対して周囲の人が配慮を期待されることは次のようになります。

1．電車やバスで席を譲る
2．駅や商業施設等での声かけなどの配慮
3．災害時における安全避難の支援

周囲の人は気づいたら積極的に声かけをして、障がいのある人が安心して出かけられる社会にしたいものです。

ひらくはココにあります。

男女共同参画センター“ひらく”、公民館（11館）、図書館（11か所）、地域センター（19館）、大学（6か所）、福祉会館、市民総合体育館、児童館(3館)、市内保育園、幼稚園、健康センター、健康福祉事務センター、市役所、東部・西部出張所、郵便局（17か所）、市内各駅（7か所）、ふれあい下水道館

小川町 手作りクッキーの店歩、商工会館、JA 東京むさし、小平警察署、小平消防署小川出張所、南台病院、和食処楠
小川西町 佐野商店、たましん小平支店、NMC ギャラリー、小川ホーム
小川東町 ギャラリー青らんぎ
上水本町 アトリエ・パンセ
鈴木町 eggg cafe、サイン・カフェ「ベリーユー」
学園西町 ビューティーサロンサンローズ、梁里館、美容室ヘアーグラシュ、本間歯科、ヘアーサロンサンライズ、笹間住宅資材、学園接骨院、国際交流協会、しらき鍼灸治療院
学園東町 日本堂文具店、梅の里、アクティブスタジオ、りそな銀行小平支店、おだまき工房、きそ歯科クリニック、ふく歯科、寝具センター丸新、美容室 Je、とりあん、一橋鍼灸接骨院、お化粧のしのざき、Kimamaya T&K、宮鍋園本店、レンタル BOX 学園坂
美園町 多摩済生病院、カフェラグラス、珈琲の香、POEM（ぽえむ）、永田珈琲、ルネこだいら、子育てサポートきらら、アンデスの家ボリビア
仲町 小平消防署
大沼町 ガスミュージアム
花小金井 公立昭和病院、Cafe & Deli hug、Tacos Mercado、HANA cafe style、上原薬局２丁目店

ひらく
第50号
令和４(2022)年
３月発行

発行/小平市地域振興部市民協働･男女参画推進課
☎ 042-346-9618　FAX 042-346-9575

企画･編集/小平市男女共同参画推進実行委員会
浅野　里美　北川　紘二　谷原　裕子
安食世津子　笹尾かをる　中村　幸世
岡　武左　髙橋　雅子　橋本　正光
岸　和夫　高浜　志織

令和４年度　小平市男女共同参画推進実行委員　募集！

男女共同参画を進めるため、講演会の企画・運営、広報誌『ひらく』の企画・編集などの活動をしていただける方を募集します。任期は令和５(2023)年３月末までです。

対　　象　・市内在住・在勤の方(経験は問いません)
・月１～２回の会議(平日または土曜日の昼間に開催)に年に半数以上参加できる方

募集期間　令和４年４月５日（火）～４月28日（木）

応募方法　下記の必要事項をご記入の上、郵便・FAX・電子メールで応募先へ。
①氏名(ふりがな) ②住所 ③生年月日 ④応募動機(400字程度) ⑤メールアドレス

応 募 先　小平市 地域振興部 市民協働・男女参画推進課 男女共同参画担当
詳細は市報４月５日号または小平市ホームページをご覧ください。

『ひらく』は男女平等な社会、だれもが生きやすい社会、住みやすい地域を作るために役立つ広報誌です。公募市民が企画・編集をしています。